

ふたつの人事異動と権力温存

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

教授 玉田 芳史

1. はじめに

2015年8月に『官報』で重要な人事が2つ発表された。8月19日付けの内閣改造と8月28日発表の将官人事異動である。どちらも、2014年5月22日クーデタで誕生した軍事政権の延命にとって大きな意味を持っている。内閣改造は、政権発足から1年が経過し、さしたる成果を上げることができていないことへの対応を主因としている。とりわけ経済の低迷への批判が強まる一方であったため、経済閣僚の交代に主眼を置く内閣改造となった。経済を統括する副首相が、スラユット政権でも登板したプリーディヤートーンから、タックシン政権時代の実績を評価されるソムキットへ交代した。他方、軍隊の人事異動は10月1日から始まる新年度に向けた定期異動である。現職の陸軍総司令官が（海軍総司令官、国軍最高司令官、国防次官といった最高幹部と揃って）定年を迎えるため、規模の大きな異動となり、誰が後任の司令官になるのか注目を集めた。

プラユット軍事政権は、人事の刷新により政権の強化を図った直後の9月6日には2つの大きなハードルを越えた。1つにはタックシン元首相から警察中佐の階級を剥奪し、もう1つには10カ月前から起草が進められてきた憲法草案を否決した。首相は階級剥奪を「国王陛下の負担を軽減するため」と9月6日に説明した¹。国王夫妻は2013年8月以後フアヒン離宮とシリラート病院の往來を繰り返し、15年5月31日からは病院に戻られている。宮内事務所（宮内庁）は国王の病状に関して、8月10日に声明文第14号、9月には7日に同第15号、14日に同第16号、16日に同第17号、28日に同第18号を立て続けに発表した。病状を気遣う国民を安堵させるかのように、9月1日には国王が病室を出て病院内の売店へ出かけられた様子が報じられていた。君主制への絶対的忠誠を強調して止まない軍事政権にとっては、階級剥奪は健康回復のための一助なのかも知れない。

本稿では、内閣改造と軍人事異動の概要を説明し、その目的が目先の2つのハードルを越えることだけにはとどまらず、軍事政権の延命ひいては特定の軍派閥による権力温存にあることを明らかにしたい。

¹ “PM defends use of Article 44 on Thaksin”, *The Nation*, Sep 7, 2015 (<http://www.nationmultimedia.com/politics/PM-defends-use-of-Article-44-on-Thaksin-30268290.html>).

2. 内閣改造

内閣改造と軍人政権

プラユット政権は2014年8月30日の発足であり、同年11月18日に小幅な内閣改造を行っている。今回の15年8月19日の改造は、10名が閣外に去り、新たに10名が入閣した。閣内に残ったもののうち、9名は持ち場が変更になった（表1参照）。

表1 2015年8月19日の内閣改造（変更分のみ）

	旧	新
副首相	×ブリーディヤートーン・テーワクン	☆ソムキット・チャートウシーピタック
副首相	×ヨンユット・ユッタウォン	△#プラチン・チャントーン
副首相	#タナサック・パティマープラコーン	△#タナサック・パティマープラコーン
副首相	----	△#ナロン・ピパッタナーサイ
財務大臣	×ソムマーイ・パーシー	☆アピサック・タンティウオーラウォン
外務大臣	#タナサック・パティマープラコーン	△ドーン・ポーラマツウィナイ
外務副大臣	ドーン・ポーラマツウィナイ	---
農業協同組合大臣	×ピーティボン・ブンブン	△#チャトラチャイ・サーリカンラヤ
農業協同組合副大臣	×アムヌワイ・パティセー	---
運輸大臣	#プラチン・チャントーン	△アーコム・トゥームピッタヤーパイシット
運輸副大臣	アーコム・トゥームピッタヤーパイシット	☆オームシン・チーワブルック
天然資源・環境大臣	#ダーボン・ラッタナスワン	△#スラサック・カーンチャナラット
情報工学・通信大臣	×ボーンチャイ・ルチプラパー	☆ウットム・サーオナーヨン
エネルギー大臣	×ナロンチャイ・アッカラセーニー	☆#アナンタボン・カーンチャナラット
商務大臣	#チャトラチャイ・サーリカンラヤ	△アピラディー・タントラーポーン
商業副大臣	アピラディー・タントラーポーン	☆スウィット・メーシンシー
労働大臣	#スラサック・カーンチャナラット	☆#シリチャイ・デッサタクン
教育大臣	#ナロン・ピパッタナーサイ	△#ダーボン・ラッタナスワン
教育副大臣	×クリッサナボン・キーラティコーン	☆ティーラキアト・チャルーンセータシン
公衆衛生大臣	×ラッチャタ・ラッチャタナーウイン	☆ピヤサコン・サコンサッタヤートーン
公衆衛生副大臣	×ソムサック・チュンハラット	----
工業大臣	×チャクラモン・パースクワニット	☆アッチャカー・シーブシルアン

凡例 ×閣外に去ったもの、#軍人、☆新入閣、△担当省変更

新たに入閣した10名は次の通りである。(1)ソムキット(1953年7月15日生まれ)は、タムマサート大学経済学部卒業、NIDA 修士号、さらにアメリカのノースウェス

タン大学のケログ経営大学院にて経営学の博士号。タックシン政権で2001年から05年にかけて財務大臣や副首相を務めた。06年にはタックシンと袂を分かち、スラユット政権時代にはプリーディヤートーンとの不仲が表面化していた。(2)アピサック(1953年8月28日生まれ)はチュラーロンコーン大学工学部卒業、アメリカのテネシー大学でMBA。多くの銀行で経営陣に加わってきた。ソムキットの高校時代の同級生。(3)オームシン(1948年8月21日生まれ)はカセサート大学とアメリカのハーヴァード大学で経営学を学んだ。通信公社(国際電話と郵便)の副社長、民営化後にはタイ郵便会社の社長、14年クーデタ後には国鉄理事長。(4)ウットム(1956年8月3日生まれ)はアメリカのブラウン大学で電気工学(学士)、ノースウェスタン大学ケログ経営大学院でMBA、マサチューセッツ大学アマースト校大学院で金融の博士号。金融会社勤務後、NIDAの教員。15年6月には私立バンコク大学学長。ソムキットがタックシン政権で財務大臣を務めた時に顧問であった。(5)アナンタポーン(1955年8月15日生まれ)は陸士26期生。陸軍では財務を担当した。スラサック大臣とは親族である。(6)スウィット(1961年5月12日生まれ)はマヒドン大学薬学部を卒業。アメリカに留学して、ノースウェスタン大学のケログ経営大学院にてマーケティングの博士号取得。バンコクの経営大学院SASINで教鞭をとるほか、ビジネス関係の著作多数。ソムキットと親しい。(7)シリチャイ(1955年2月3日生まれ)は陸士24期生。情報畑の出身であり、陸軍で参謀長補佐、副参謀長、参謀長、総司令官補佐を務めた後、国軍参謀長、さらに定年前の1年は国防事務次官。(8)ティーラキアト(1960年1月16日生まれ)はチュラーロンコーン大学医学部卒業。14年10月に教育大臣補佐官。(9)ピヤサコン(1948年7月9日生まれ)はマヒドン大学シリラート病院医学部卒業。2000年から同学部長、2007年から11年にかけては同大学長を務めた。(10)アッチャカー(1955年7月14日生まれ)はチュラーロンコーン大学経済学部卒業、イギリスのサセックス大学で経済学の学位取得。工業省に入省し、投資奨励委員会(BOI)事務局長、工業振興局長などを経て、2014年から事務次官。

2014年クーデタ当時の軍首脳タナサック国軍最高司令官、ナロン海軍総司令官、プラチン空軍総司令官はいずれも省の担当を外れて副首相になった。副大臣として軍人の大臣を補佐してきたドーン、アーコム、アピラディーの実務官僚3名が大臣に昇格した。副首相への棚上げ、実務家の昇任という2点からは、軍人色を薄めて実務家内閣を目指したのではないかと思われるかもしれない。しかしながら第1に、軍人閣僚のうち、ダーポンは教育大臣へ、チャトラチャイは農業・協同組合大臣へ、スラサックは天然資源・環境大臣へ転じた。新たにアナンタポーンがエネルギー大臣、シリチャイが労働大臣として入閣したため、軍事閣僚の人数は2名増えた。第2に、閣外に去った10名はいずれも文民である。エコノミストのプリーディヤートーン、ナロンチャイ、学者のユッタウォン、ラッチャタ、官僚のポーンチャイ、ピーティポン、チ

ヤクラモン（これら3名は事務次官）、ソムサック、ソムマーイ、農業問題に詳しい政党政治家アムヌワイである。彼らが誇りうる実績を残したとはいいがたいものの、閣内に残った軍人閣僚に比べて見劣りがしたかといえれば必ずしもそうではない。

プラユット首相は、会計年度の変わり目にあたる2015年10月1日を期して、官僚と閣僚の兼務を禁止することにした。該当するのは、定年までもう1年を残す首相府事務次官のパナッダーと国家経済社会開発委員会事務所長のアーコムである。政権の法務を取り仕切るウィッサヌ副首相は、2015年8月26日にこの点について次のように説明した。政権発足当初には、(1) 入閣してくれる人物を見つけるのが容易ではなく、(2) 官僚であれば実務能力が高いと思われたため、現職の官僚を何名も閣僚に任命した。政権発足から1年がたつと、国民の信頼を獲得するために手を尽くさなければならぬ。経済担当閣僚の一新だけでは足りず、閣僚が職務に専念する必要がある。この説明には一理があるものの、的確ではない。以前に紹介したように²、長い伝統のあるタイの軍事政権では、閣僚の大半は行政実務に詳しい官庁幹部であり、軍人は少数にとどまってきた。それに対して、プラユット政権は軍人の入閣者が当初から異例に多く、今回の改造ではさらに人数が増えた。行政実務の知識や経験が乏しい軍人が多数入閣して優れた実績をあげられる可能性は乏しい。素人政権の発足と継続は、プラユット首相が国政を甘く見て軍人仲間で運営できると考えていることに一因があるかも知れない。命令と強制によって行政官僚も国民も服従させることができると考える軍人氣質が透けて見えるような気がしてならない。

経済政策の見直し

内閣改造のポイントは、経済担当閣僚の入れ替えであり、それに伴う経済政策の見直しである。民主的な正当性がない軍事政権にとっては、選挙しか政治参加の方途がない庶民を弾圧することはできても、その支持を取り付けることは困難であるため、選挙を重視しない上流階級や都市中間層からの支持をつなぎ止めることが不可欠である。そうした富裕層は民主主義への拘りが乏しいものの、経済状況には関心が強い。経済の低迷がいつまでも続くと、富裕層からの支持を失ってしまう可能性がある。そこで、テコ入れに乗り出したということである。

このために、経済政策の責任者をプリーディヤートンからソムキットに交代させた。8月25日の閣議で6名の副首相の役割分担が決められ、ソムキットは財務、外務、農業・協同組合、商務、工業、運輸、科学・技術の6省を担当することになった。今回の改造では、これらのうち科学・技術大臣を除く5省の大臣が交代した。経済に加えて外務も統括することになった点も注目される。

² 拙稿「プラユット政権の陣容と特色」『タイ国情報』2014年9月号、2-3頁。

具体的にどのような方針を採用するのかといえば、タクシノミクスである。それは両面政策 (dual track policy) であって、貧困層向けの所得再配分政策一辺倒ではなく、富裕層向けの成長政策と組み合わせたものである。それゆえにこそ、2005 年総選挙では農村部だけではなく、首都バンコクでもタックシン派与党の得票率や議席の増加につながっていた。政治権力闘争に熱中する人々は、タックシン体制つまりタックシン流の手法を否定しようとして、タクシノミクスを貧民優遇のポピュリズムであり、利益をちらつかせて貧民を籠絡する政策と批判してきた。プレーム枢密院議長が、2015 年 9 月 2 日の講演で、「ポピュリズムのせいで、一部の国民は考える気がなくなり、援助を待ち受けるばかりになる。ポピュリズムはタイ国とタイ人を弱体化させてしまう」と批判したように³、ポピュリズムは禁じ手であり、政敵を罵倒する言葉になっている。しかしながら、06 年クーデタ後の軍事政権も、08 年からの民主党政権も、14 年からの軍事政権も、看板こそ違っても、内実では所得再配分にほかならない政策を実施してきた。

ソムキット入閣後の 2015 年 9 月 2 日の閣議で、村落基金への 600 億バーツ、区 (tambon) の生活改善に 363 億バーツ、小規模な公共事業に 400 億バーツの予算を投じることが決定された。プラユット首相は、国民の多数を占める低所得層への支援と説明している。また、ポピュリズムという用語を避けて、国民国家 (pracha-rat) という耳慣れない名称をつけている⁴。しかし、これがタクシノミクスであり、タックシン政権時代を想起させる政策であることは否定できない。主な違いは、選挙公約を実現するための政策なのか、銃口から生まれて選挙を先送りする政権の延命策なのかという点である。この経済政策の転換が内需を刺激したり輸出を刺激したりして成長につながるかどうかは、諸条件がタックシン政権時代とは異なっているので定かではなく、今後見守っていく必要がある。

3. 陸軍人事異動

陸軍ではウドムデート総司令官が定年を迎えたために、2015 年 10 月 1 日には、「5 虎」と呼ばれる総司令官、副総司令官、総司令官補佐、参謀長で構成される最高首脳 5 名が大幅に入れ替わった。後任の総司令官は、5 虎から選ばれるのが大原則である。異動名簿を作成するのは総司令官、すなわち退官するウドムデートであった。5 虎のうち 15 年 9 月に定年を迎えないのは、総司令官補佐のティーラチャイとブリーチャ

³ “Prem advises against populist policies”, The Nation, Sep 3, 2015 (<http://www.nationmultimedia.com/politics/Prem-advises-against-populist-policies-30268024.html>).

⁴ “Is Prayut's 'pra cha rat' just another word for populism?”, The Nation, Sep 28, 2015 (<http://www.nationmultimedia.com/politics/Is-Prayuts-pra-cha-rat-just-another-word-for-popul-30269678.html>).

一であった。本命ティーラチャイと、穴馬プリーチャーの一騎打ちとみなすものが多かった。後者が対抗馬として浮上したのは、1 つにはプラユット首相の実弟だからである。弟が総司令官候補になっていることについて記者から問われると、首相は8月11日に「弟が何か悪いことをしたのか」と応じて、就任の可能性を仄めかした。もう1 つには、ウドムデートが同期のティーラチャイと不仲であり、報道によれば後任としてプリーチャーを選んでいて、しかし、副首相兼国防大臣のプラウィットから働きかけを受けたため、名簿奏上の前日になってティーラチャイに変更したと報じられている。プラウィットによる強引な人事介入は、海軍総司令官、警察長官、国家安全保障会議事務局長をめぐっても起きていたため、圧力説にも信憑性がある。しかし、陸軍については、当初からティーラチャイと決まっていたと考えたほうが自然であろう。その理由は3つある。

陸軍には4つの地方管区がある。バンコクに司令部があり中部地方を管轄する第1管区には第1師団（司令部所在地バンコク）、第2歩兵師団（東部のプラーチンブリー）、第9歩兵師団（西部のカーンチャナブリー）の3師団、ナコーンラーチャシーマーに司令部があり東北地方を管轄する第2管区には第3歩兵師団、第6歩兵師団、第3騎兵師団の3師団、ピッサヌロークに司令部があり北部地方を管轄する第3管区には第4歩兵師団、第7歩兵師団、第1騎兵師団の3師団、ナコーンシータムマラートに司令部があり南部地方を管轄する第4管区には第5歩兵師団と第15歩兵師団がある（図参照）⁵。管区相当の部隊として、ロップブリーに司令部がある特殊戦争部隊には第1特殊戦争師団、バンコクに司令部がある防空部隊には高射砲師団がある。実戦師団としては、これら以外に陸軍司令部直属の第2騎兵師団がバンコクにある。これらのうち、ティーラチャイは第1管区、プリーチャーは第3管区の司令官から5虎に加わった。過去に総司令官に昇進した管区司令官は、第1管区、第2管区、そして特殊戦争部隊の司令官しかいない。断然多いのは、第1管区司令官である。これが第1の理由である。

その第1管区の3個師団のうち、過去に陸軍総司令官を輩出してきたのは第1師団である。ところが近年は第2歩兵師団の台頭が著しい。「東部の虎」と呼ばれる第2歩兵師団生え抜きで初めて陸軍総司令官に就任したのはプラウィットである。2004年のことであった。だが2007年以後は、第2歩兵師団出身者が、陸軍総司令官ポストを握り続けている。これが第2の理由である。

第2歩兵師団がどのようにして権力を獲得し、維持してきたのかを確認しておこう。

(1)立役者は、2006年クーデタで主力部隊を率いた第1管区司令官アヌポンであった。

⁵ 第3騎兵師団、第7歩兵師団、第15歩兵師団は、2006年クーデタ以後に設置されて整備が進められている実戦師団である。

陸軍司令部

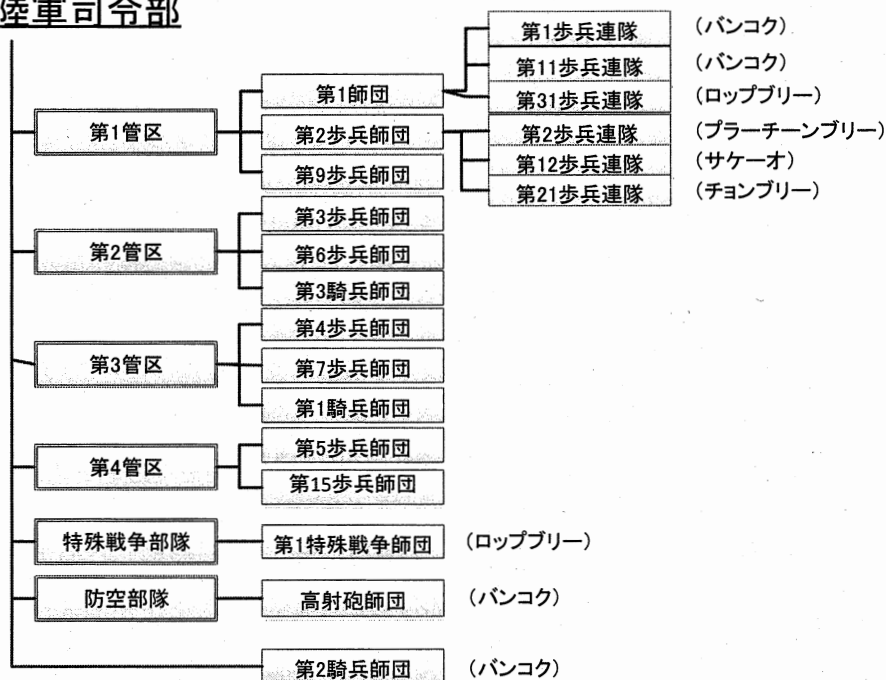


図 陸軍の主要実戦部隊編成図 (2015 年)

出所：筆者作成。注：連隊は政治的に重要な歩兵連隊のみ表示。

アヌポンは第 2 歩兵師団長に続いて第 1 師団長も経験した。これは第 2 歩兵師団生え抜きの将校では、90 年代のアーチャウィンに続く 2 人目の快挙であった。これはアヌポンが当時の首相タクシンと軍予科学校の同期生であったことと無縁ではない。(2) 第 2 歩兵師団出身者は、プラウィットとアヌポンが切り拓いた昇進ルートと、2006 年クーデタ以後に獲得した政治力のゆえに、第 1 師団出身者を抑えて、次々と第 1 管区司令官に就任するようになった。プラユット、カニット、ウドムデート、ティーラチャイ、テープポンである (表 2 参照)。うち 3 名が陸軍総司令官に就任したのも同じ理由に由来する。(3) 第 2 歩兵師団には第 2、12、21 の 3 個の歩兵連隊があり、アヌポン、プラユット、ウドムデート、テープポンは第 21 歩兵連隊長経験者である。同連隊は王妃警護部隊であり、「王妃の虎兵」と呼ばれて、王妃から信頼や寵愛を得てきた。第 2 歩兵師団の中でも同連隊出身者が頭角を現してきた理由はここにある。ちなみに、プラウィットは第 12 歩兵連隊長、ティーラチャイは第 2 歩兵連隊長の経験者である。(4) 近年の第 21 歩兵連隊長のうちウドムデートとパーヌワットは第 2 歩兵師団長ではなく、第 9 歩兵師団長になった。第 2 歩兵師団長のポストに空きがなかったからである。15 年 10 月には第 12 歩兵連隊長経験者が第 9 歩兵師団長になった。

かつては第1師団出身者が第2、9の歩兵師団長に就任することが多かったのですが、これは大きな変化である。第2歩兵師団出身者は、ウドムデートの例が示すように、第9歩兵師団長経由でも第1管区司令官への昇進が可能になった。

第2歩兵師団出身者は、2006年以後の陸軍総司令官4名全員、第1管区司令官7名中5名を占めている。とはいえ、第2歩兵師団が第1師団を凌駕するようになったとはまだいえない。第2歩兵師団生え抜きの将校で、第1師団長に就任したのは、2015年現在アヌポンが最後である。第1師団にはこれまで士官学校や幹部学校の成績優秀者や軍最高幹部の子弟が配属されてきた。第2歩兵師団はその第1師団から陸軍の本丸の地位を奪うには至っていない。それゆえ、第2歩兵師団が主導権を握り続けるためには、第1師団への警戒を怠ることができない。たとえば14年10月の佐官の人事異動では、当時のウドムデート総司令官は、第1師団の第1、11、31の連隊長を異動させ、第31歩兵連隊に勤務する側近を第11歩兵連隊長に、さらに第21歩兵連隊の副連隊長を第31歩兵連隊長に任命した。第1師団への支配を強めるには、第1師団から忠実な将校を見出し同師団の要職に抜擢するのみではなく、このように第2歩兵師団から精鋭を送り込むのも有効な方法であろう。

東部の虎派閥の幹部は、Prawit (通称 Pom) 副首相兼防相、Anuphong (同 Pok) 内相、Prayut (同 Tu) 首相の3名である。彼らは、本名もしくは通称の頭文字をとって3Pと呼ばれており、退役済みであるにもかかわらず首都中心部の第1歩兵連隊敷地内部に邸を構えている。陸軍の掌握に余念がない派閥の頭領ブラウウィットにとっては、陸軍総司令官を第2歩兵師団以外から抜擢するのはありえないことであった。ティーラチャイは第2歩兵師団生え抜きであり、2013年から第1管区司令官を務めて14年クーデタ時には首都の部隊を指揮する立場にあった。第3管区出身者の抜擢は、権力独占を崩す蟻の一穴となりかねない。自力ではなく先輩の力添えで総司令官になったウドムデートが、先輩の意向に反する人事異動を断行する余地は乏しかったと想像される。プラユットにしても、ブラウウィットやアヌポンのおかげで陸軍総司令官になり、それゆえ政権も奪取できたのであるから、事情は似ていた。これがティーラチャイでなければならなかった第3の理由である。

表2 第2歩兵師団出身者と陸軍首脳

年	陸軍総司令官	第1管区司令官	第2歩兵師団長	第21歩兵連隊長
2015	ティーラチャイ(25)	テープボン(29)	シーサック(32)	ウォーラウィット(35)
2014	ウドムデート(25)	カムパナート(27)		
2013		ティーラチャイ(25)	クーキアト(31)	
2012		パイブーン(26)		チャルーンチャイ(34)
2011			テープボン(29)	

2011			ピシット(28)	
2010	プラユット(23)	ウドムデート(25)		
2009				サンティポン(33)
2008		カニット(24)		
2007	アヌポン(21)		フリット(26)	
2006		プラユット(23)		テープポン(29)
2005	ソンティ(17)	アヌポン(21)	カニット(24)	
2004	ブラウィット(17)			パーヌワット(28)
2003		パイサーン(18)	プラユット(23)	
2002		ブラウィット(17)	アヌポン(21)	ウドムデート(25)
2001		ポーンチャイ(14)		
2000		ソムタット(14)		
1999			ウドム(18)	
1998		タウィープ(14)		プラユット(23)
1997		ニポン(14)	ワンチャイ(17)	
1996		ウィニット(9)	ブラウィット(17)	アヌポン(21)

() の数字は陸軍士官学校の期。

■ は第21歩兵連隊長経験者、■ はそれ以外の第2歩兵師団出身者。

4. 今後の展望

軍事政権長期化

2015年9月6日に、改革評議会は憲法草案を否決した。135票の反対票があり、軍人・警察官の議員は31名中賛成がわずか3名にとどまり、反対率が際立って高かった。否決するように命じたのではないかと問われると、プラユット首相は「退役軍人に自分が命令できるだろうか。メディアの思い込みに過ぎない。軍人を愚弄している」と述べて、政権の関与を否定した⁶。軍が任命した起草者が軍が望む非民主的な基本方針に沿って作った草案を、軍が任命した評議会が非民主的という理由で否決したのであるから、否決が指示や助言に基づいていた可能性は極めて高い。この否決に伴い、憲法起草委員21名を新たに選び、憲法起草作業を最初からやり直す必要がある。しかも、民主政治復帰後に内閣や国会の上に君臨するのではないかと疑念を抱かれている「国家改革戦略推進委員会」の委員200名の任命が近日中に行われる予定になっている。そこには改革評議会のメンバーも任命されると見込まれている。

プラユット首相は2015年2月に来日したときに、16年初めには総選挙を実施する

⁶ “Prayut chi so.po.cha. khwam ratthathammanun so prongdong mai dai”, Krungthep Thurakit, Sep 7, 2015 (<http://www.bangkokbiznews.com/news/detail/664455>).

と述べていた。憲法の起草先送りは、国際公約に反する総選挙先送りを意味している。現状のまま総選挙を行えば、14年クーデタが06年クーデタと同様に「無駄になる(sia khong)」ことが、クーデタ支持者の間では強く懸念されているからである。副首相ウィッサヌによれば、総選挙実施までには20ヶ月が必要である。15年10月に新しい憲法起草委員を任命してから、憲法起草に6ヶ月、国民投票に4ヶ月、憲法関連法整備に6ヶ月、選挙実施に4ヶ月との説明である。これによると、選挙の実施は早くても17年ということになる。プラユット首相は国連総会出席のために15年9月に訪れたニューヨークで、総選挙を17年に実施すると明言した。だが、改革の美名のもとで、タックシン派の壊滅、あるいはタックシン派が選挙で勝利しても権力を握れない仕組みの整備を構想しているとすれば、実現が困難であるがゆえに、憲法の起草はさらに先送りされる可能性もある。改革は永久に続きかねない。

これからの軍隊

2014年5月クーデタに始まる軍事政権には民主的正当性がない。1960年代の長期軍事政権は、王室からの支持と経済成長の2点に正当性を求めようとした。プラユット政権は君主制への絶対的忠誠を強調しつつ、不敬罪の取締に力を入れている。しかしながら、王室との間に距離を置こうと努めており、王室からの積極的な支持の表明を求めているわけではない。せいぜいのところ、プレーム枢密院議長が軍事政権を賞賛するにとどまっている。その分比重が高まる経済成長については、経済政策の転換を視野に入れた内閣改造を行った。それが上首尾にゆくかどうかは予断を許さない。経済面の成否はさておき、数年続きそうな軍事政権を維持するには、盤石の支持基盤が軍隊に不可欠である。

2015年10月からの陸軍首脳の陣容は、総司令官がティーラチャイ(陸士25期生)、副総司令官がワリット(26期生)、総司令官補佐がカムパナートとチャルムチャイ(27期生)、参謀長がピシット(28期生)となった。ワリットは第2歩兵師団長在任中の2010年4月10日に赤シャツのデモ隊掃討作戦を指揮して負傷したことで有名である。東部の虎たるティーラチャイとワリットはともに16年9月に退役する。残るのは、17年退役のピシットとカムパナート、18年退役のチャルムチャイである。チャルムチャイは特殊戦争部隊の出身であるため総司令官就任の可能性が低い。残る2名は第1師団の生え抜きである。カムパナートは第31歩兵連隊の出身であり、同連隊長、第1師団長、第1管区司令官を経て、総司令官補佐になった。他方、ピシットは第11歩兵連隊の出身であり、同連隊長、第2歩兵師団長、第1師団長、第1旅団長、陸軍副参謀長を経て、陸軍参謀長になった。ピシットは第1師団出身ながら、近年では異例なことに、11年4月から半年だけとはいえ、第2歩兵師団長を経験している。外様のピシットが東部の虎と見なされるのであれば、総司令官候補として最有

力であろう。

第2歩兵師団の期待の星は第21歩兵連隊長、第2歩兵師団長という王道を歩み、2015年10月に第1管区司令官に就任したテープボン（29期生、18年退役）である。第2歩兵師団長離任から第1管区司令官就任までに、彼は2年を要している。プラユットは1年、カニットは半年であった。それに比べると、遅いといえる。もし1年で通過していれば、15年10月には5虎の仲間入りが可能であった。テープボンが第1師団出身者を押しのけて16年に総司令官に就任するには、16年4月に5虎入りしておく必要がある。このことは、15年10月に閑職ながら大將に昇級した元第21歩兵連隊長パーヌワット（28期生、17年退役）にも当てはまる。第2歩兵師団生え抜きを確実に総司令官に就任させようとするならば、そうした強引な異動が行われる可能性がある。しかしながら別の可能性もある。一部で報じられているように、プラウィット副首相が枢密院議長に代わって舞台裏の権力者になろうとしているのであれば、総司令官として独自の権力基盤が脆く在任期間が短い将校を選好するであろう。御輿は軽い方がよいからである。この点は、政権の安定度にも左右されるので、断定はできない。さし当りは半年後16年4月の異動を注視する必要がある。

